

晴天の霹靂

徳川

息の詰まる音を、聞いたような気がした。

その音は助手席にいる者から発されたものなのか、それとも自分の喉から出たものなのか……健二は深く考へる前に思いつ切り右足を突つ張つた。

瞬間、ぐん、とシートベルトが健二の体に食い込んだ。

圧迫されて息が止まる。霞む視界で暴れるハンドルにしがみついたが、一向に車は止まる気配を見せない。雪の

上を滑っているのだ、と健二は頭の片隅で理解した。しかし、今更後悔したところでどうすることもできない。無我夢中で必死にハンドルを繰る。それはひどく軽く、気休めにすらならないことはわかつていた。それどころか、健二の乗った車はスピンを伴い、より勢いを増して斜面を滑り降り始めることがなつた。

健二の目に線状の景色が写る。雪の白、林の茶、そして海の青。それらが入り乱れ、拡散し、出鱈目に描いた絵のようになつて窓を汚している。健二はもう何も考えることができなくなつていた。縦横無尽の加速度と浮遊

感が、健二の感覚全てを支配していた。もう何も見たくない、健二はそう強く思つて、逃げるよう目に目を瞑つた。

そして、車は小さな衝撃を最後に、ようやくその動きを止めた。

「びっくりしましたね。どうやら縁石に乗り上げた勢いで滑つたみたいですよ」

そう言つて、高橋は飛び込むように助手席に乗り込んできた。ドアの開閉によつて生まれた冷たい風が、健二の頬をひやりと冷ます。健二は横目で高橋を見て、すぐ

に視線を自分の膝へと戻してしまつた。そして時間を掛けて、小さく「そうか」とだけ呟いた。ひどく乾いた声だつた。

「ちよつと健二さん、大丈夫ですか？　運転代わりますか？」

健二の声色に驚き、高橋は健二の顔を覗きこんだが、すぐに身を引いて息を飲んでしまつた。うつむいた健二の顔は憔悴しきり、とても四十五歳の年齢とは思えないほど、ひどく老齢しているように見えたからだ。高橋は健二の肩を軽くゆすり、努めて優しく「大丈夫ですか？」

と尋ねたが、健二は顔を上げることさえできなかつた。

死ぬところだつた、と健一は思つた。

一昨日の深夜まで降り続いた初雪は、日中になつて雨へと変わつた。融かされた雪は、舗装された道路の上を覆うように固まり、非常に滑りやすくなつていたのだ。

早い初雪だつたせいで、社用の乗用車はまだ雪面対策が取れていなかつたのだろう。そこまで考えたところで、健二は細く震えた息を吐いた。

沈黙に耐えかねたのか、高橋は「いやー、危なかつた危なかつた」と誰に言うわけでもなく繰り返し呟いてい

た。その言葉で、最後の小さな衝撃を思い出した健二はふと心配になる。

「……ぶつけたのか？」

「あ、いえ、まあ」

少なからず反応を見せた健二に、高橋は曖昧な返事で返した。

「かなり長く滑りましたが、結構減速していたみたいで、ちょっと擦つたぐらいですよ。もう少し速かつたら、突き当たりのガードレールから海にドボンでしたからね。ラツキーですよラツキー」

明るい声だつたが、どこか浮ついた様子だつた。

咄嗟のブレーキが間に合つたのか、それともスピンさせたことが不幸中の幸いだつたのか。座つたままの健二には確かにことはわからなかつたが、どうやら急死に一生を得たようだつた。健二は目を瞑つたまま、朦朧とした頭を何とか回転させて周辺の地形を想像した。長い斜面からT字路の形で、海に面した道へ出る場所だつたはずである。あの粗末なガードレールに助けられたのか、と健二は震える手で額の汗を拭つた。

「健二さん？ 運転どうします？」

再度名前を呼ばれた事に気付き、健二は「ああ、ああ、頼むよ」と高橋に告げた。健二は二、三度強く目を瞑り、重く脱力した右腕でドアを搔いて、やつとのことで車の外へと足を出した。途端、強い寒風が健二の体を撫でた。崖にぶつかった海風が健二のところまで巻き上がり始めたのだろう。堪らず健二は目を細めた。

そして、恐る恐る目を開くと、健二の視界は、鮮やかな青色に染められていた。

空は気持ちの良い快晴だつた。

健二はまるで久しぶりに室内から外へ出たような、妙

に新鮮な錯覚に陥つた。そんなはずはない、今日も朝に家から会社へ出勤してきたのだ、と健二は改めて考え直したが、しかし、それでも健二に与えた感覚は強烈だった。

健二は一度遠くの空を見上げ、そのままゆっくりと視線を落とした。青が徐々に薄くなり、そして一本の水平線を境に、再び深い青の色を取り戻していた。きらきらといくつもの陽光を反射させ、風にあわせて動く海が見事なまでに眼下に広がつていた。

見慣れていたはずの北陸の海は、これほどまでに美し

かつたのか。健二は先ほどの恐怖に上書きするよう、
より強く体を震わせた。空気の冷たさに反して、日差し
はとても心地のよいものだつた。車内のエアコンとは比
べ物にならないほど、清々しい暖かさだつた。

健二は空を仰ぎながら大きく空気を吸い込み、体に留
まつていた倦怠感と共に一気に吐きだした。

「……気持ちがいいな」

「え？」

健二の唐突な呟きに、高橋は耳を疑つて聞き返した。
「気持ちがいいんだ」

健二は再びそう言いながら、ゆっくりと両腕をまわして、もう一度、深く呼吸をした。直前までの体の気だるさは嘘のように取れていた。むしろ、自然と朝に目覚めたときのような爽快感が、健二の体を満たしていた。まるで生まれ変わったようだ、と健二は思えた。

その様子を見ていた高橋は、首を傾げながらも「とりあえず戻りましょう」とだけ告げて、運転席へと乗り込んだ。

「これから何処へ行くんだ?」

「は？」

高橋は先程と同じように、しかしよりも驚きを込めた声で、助手席に座つた健二の言葉を聞き返した。ハンドルを握りながら高橋は健二の顔を伺つたが、健二は窓枠に肘を預けたまま穏やかに前を向いていた。

「ちよつと、本当に大丈夫ですか健二さん。さつきので頭でも打つたんじゃないですか」

高橋は小さく笑いながら、からかうように健二に返した。

「いや、大丈夫だよ。本当に。どこも打つてないし、痛

くも無い」

「会社に戻るんですよ」

「会社か。 そうか、 会社か」

健二も高橋と同様に、 小さく笑いながら答えた。 高橋はもう一度、 健二の顔を盗み見てから「勘弁してくださいよ」と溜息混じりに呟いた。

健二は終始穏やかな笑みを浮べていたが、 心中では『会社か。 そうか、 会社か』と、 何度も同じ事を唱え続けていた。 しかし、 幾ら繰り返し唱え続けても、 その言葉は一向に健二の胸に落ち着こうとしなかった。 どうにも今

の健二には、「会社へ戻つて働く」という当たり前の行為が、やけに現実味の無いことのように思えてならなかつたのだ。

会社に戻つて自分は何をするべきなのか。何のために会社に戻るのか。

二十年以上、ほとんど休むことなく勤めてきた会社だつた。今や一つの部を任せられている健二が、会社でどんな仕事をするべきなのかわからぬはずがなかつた。しかし、考えれば考えるほど、健二の感じる違和はどんどんと濃くなつていくばかりだった。そして、追うように

健二の心に浮かぶものは、先刻のまばゆく澄んだ一面の青色の光景だつた。目を閉じればよりはつきりと見ることができた。手を伸ばせば届くのではないかと思えるほど強く引かれた水平線が、健二の瞼の裏にくつきりと描かれている。これまで当たり前だと思つていたことが、

今の健二には、どうも他人事のように思えてしまうのだ。

健二を染めた色は、会社に戻つた後も青く光り続けていた。

気が付けば、健二は会社の前に立っていた。太陽はま

だ高く、歩道に融けた雪はきらきらと反射して健二の顔を照らしていた。その眩しさに俯いた健二は、いつの間にかに手に持っていたカバンを不思議そうに眺め、そして時間を掛けて、ようやく半刻前の出来事を思い出した。

会社に戻った健二は、さつそく頭に浮かんだ疑問を上司に尋ねることにした。「あなたはなぜ、仕事をしているのですか」と。数秒後、上司の顔がみるみる赤くなつていくのを見ていた高橋は、血相を変えて健二と上司の間に入り、上司に対して「事故未遂」についての説明を始めた。加えてそのときからの健二の様子の変化も、申し

訳なきそうな顔をしながらも、事細かく報告したのだつた。上司の顔色が元の色へと戻り始めたころ、健二は早退と健康診断、そして数日の有給消化を命じられることがとなつた。

健二は「そうか、そうか」と頷きながら、緩慢な動作で駅に向かつて歩き始めた。凍つた雪が靴底で小気味よく弾けた。それを見て思わず持ち上がる口角に、健二は『本当は頭を打つたのではないか』と自らを疑うほどだつたが、やはり体の何処を意識しても痛みを感じる部分はなかつた。むしろ、体の調子はここ数年感じたことの

ないほど良いように思えたほどだつた。

それにしても、従うままに取つてしまつたこの休日はどう過ごそうか、と健二は頭を悩ませた。年末年始と盆以外のまとまつた休みなど、健二は暫く経験していなかつたことだつた。一人でのんびりと散歩などをして過ごすか、それとも久しぶりに家族サービスでもしてみるか。そんなことを考えながら、健二はひときわ大きな雪だまりを踏み碎いた。

健二がリビングで早々にビールをあおつていると、慌

しい足音が玄関から響いてきた。

「まあ、びつくりした。今日は早いのね」

「おかえり、多賀子」

健二は腰を上げて妻の多賀子を快く出迎えたが、多賀子はろくに目も合わせず、足早に自室へと入ってしまった。扉を閉める音がリビングに軽く響き、健二は溜息をつきながら深く椅子へと座りなおした。

健二が作り上げてきたはずの家庭は、この上なく冷め切っていた。妻の多賀子との会話は健二の思い出せる限りでは必要最低限のものだけであり、ましてや高校生に

なつた健二の息子・裕也に対しては、顔を見る機会さえも少なくなつていたのだ。日々の仕事で遅くに帰宅する健二の食事は常に別に用意されており、健二が帰宅するころには二人とも就寝してしまつていることも多かつた。そして、休日の食事は家族各自で用意するというのが、いつの間にか暗黙のルールとなつていた。これが、健二の家庭の普通だつた。まるでルームシェアしているだけの他人のようだ、と健二は残りのビールを煽りながら思つた。

この状況を作り上げてしまつたのは、紛れも無く自分

だと健二は気付いていた。どうしてこれまで危機感を覚えなかつたのか。仕事に従事することで、家族に貢献できていると少なからず考えていた。しかし、それはただの自分の甘えだつたのだと、健二は強い後悔と共にきつく噛み締めた。

では、どうすれば取り戻すことができるのだろうか。
そう考えたとき、健二は一つの計画を思いついた。

本当に午後から用事あるから、と不機嫌そうな声色で健二に告げ、多賀子は助手席へと乗り込んだ。裕也は既

に後部座席に座つて携帯電話に向かつている。健二は二人がシートベルトをきちんと締めていることを確認したのち、ゆっくりと車を発進させた。雪はまだ融けきつておらず、晴天の空の光で白く輝いて見えた。

昨晩、健二は二人に「家族サービス」と称して、三人一緒にドライブを打診したのだつた。当然のようになじと息子に渋られた健二だつたが、時間を掛けた懇願によつて、一人はようやく首肯したのだつた。「すぐに戻るなら」という条件つきとはいえ、健二は素直に喜ばしく思つた。そしてこれからは再び家族三人で仲良く過ごせるはずだ、

と健二は心から確信していた。車内での会話はなかつたが、健二は気にはならなかつた。

数十分のドライブ後、健二は「さあ、着いたよ」と声を弾ませて二人に言つた。突然の報告に、二人ははつと顔を上げて窓の外を見渡したが、表情はすぐによろこびなものへと変わつた。それは山の中腹あたりで、住宅や木々の他に、特に目立つたものは確認できなかつたからだ。

しかし、二人が声を掛ける前に、健二は再び車を発進させた。車は徐々にスピードを上げて、凍りついた長い下り坂を降りていく。

自分と同じように変わらぬかもしれない、あの青い世界で見た霹靂を見せてやれば。

健二は穏やかな表情のまま、しかし、右足は強くアクセルを踏み込んだ。そして、三人を乗せた車は、勢いよく縁石に乗り上げたのだつた。

△了▽